［フィールドで考える］

失せ物を探すには

岡部 真由美（おかべ まゆみ）
総合研究大学院大学文化科学研究科

「あれ、どこにいったっけ」。わたしはよく口にしている。つい先日も近所のスーパーで、財布を忘れないようにと念じながら、買い物袋に野菜を入れ、家に帰ってみると、鍵を置き忘れていた。スーパーに戻る道すがら、フィールドワーク中のことを思い出した。

カメラがない！

二〇〇五年七月二一日。北タイ・チェンマイ近郊の村、早朝五時半ごろ。丘の上にある寺のスピーカーから、裾野に向かって大音量で音楽が鳴り響いている。もはや寝てはいられない。花、線香、ろうそく、果物、おかず、もち米、歯ブラシなど、すべてを手提げかごに入れてから、水浴びをする。白衣の上下を纏い、肩衣をかけて安全ピンで留め、身支度する。滞在先のお母さんと寺に着いたときには、すでに多くの人で溢れかえっていた。この二ヵ月間でいちばんの熱気だ。そう、この日は入安居（いりあんご）なのだ。

東南アジアの上座仏教社会において、雨季の約三ヵ月間を雨安居（うあんご）とよび、出家した僧侶たちは外出を控えて寺に止住する。その最初の日が入安居だ。雨安居のあいだは、満月、新月と二度の半月のたびにめぐってくる布薩（ふさつ）日に年配女性たちが白衣を着て寺を訪れ、持戒して一夜を過ごす。これがノーン・ワット（寺で寝る）だ。雨の降るなか白衣に包まれた人たちが仏道に勤しむ静寂な空気に触れたい、とかねてから思っていた。

雨安居最初のノーン・ワット。ひたすら、見よう見まねで読経し、瞑想し、説法に耳を傾けていると、あっという間に終わった。

翌朝帰宅してはっと気がついた。カメラがない。

「あれ、どこにいったっけ」。

最後にカメラを使ったのがどこかも覚えていない。大事な写真をちゃんと撮ったかどうかさえあやふやだ。考えれば考えるほど、記憶のあいまいさが浮き彫りになるばかりで、不安が募る。部屋でゴソゴソしていると、案の定、お母さんに気づかれてしまった。「ユミ、何やってるの？」別に、彼女のもち物を失くした訳ではないのに、自分のおっちょこちょいぶりを見透かされているようで、何となく気まずい。仕方なく、「じつはカメラが見当たらなくて」と白状する。お母さんとお父さんは質問を畳み掛け、わたしは歯切れの悪い返事を繰り返す。ノーン・ワットに参加した興奮の熱は一気に冷め、ジーンズに着替えてバイクで寺に駆け戻り、いろいろな人に聞いて回った。

力を貸して下さい

一日経っても音沙汰はなかった。困り果てたわたしを見て、お母さんは「ゲーオのところへ行く？」と聞いてきた。ゲーオとは、お母さんの姪の一人のもとに降りる男児の霊で、タオルハンカチを指に絡めながら、何ともいえない人懐っこい声で話すのが印象的だ。お母さんのその姪とは、そういえば、他村やチェンマイ市内からも常連客が訪ねてくる人気の霊媒師であった。なるほど、困ったときは何でも相談に行けばよいのだ。その夜早速、わたしは彼女を通じて、ゲーオにカメラが無事に見つかるように力を貸して欲しいと伝えた。ゲーオは「姉ちゃん（筆者のこと）の知らない人がもって行ったけど、盗んだんじゃない。寺で見つかる」と教えてくれた。

次の日、家に居ても落ち着かないので、寺に貼り紙をさせてもらうことにした。話を聞きつけた僧侶たちから、ちょうど同情のことばをかけてもらっていたとき、新しい知らせが舞い込んできた。早朝、沙弥（しゃみ）（少年僧）が寺の敷地を掃除していたときに、大会議棟の前にポツンと置かれているバッグを見つけ、僧侶に預けたというのだ。バッグを開いてみると、確かにわたしが探し続けていたカメラとその他諸々の物品が入っていた。どっと肩の力が抜けた。

会う人会う人が「見つかったか？」と聞いてくれる。ことの一部始終を聞かせると、皆は口をそろえて「ゲーオが助けてくれたに違いない」と言う。ずっと探し続けても見つからなかったのに、ゲーオに相談した次の日にすぐ、ゲーオの言うとおりに寺で見つかったのだから。

しかし、お父さんのように「ユミはゲーオを信じるのか？」と、ゲーオの存在そのものを疑問視する人もいる。わたしは、信じるとも信じないとも答えかねるが、もしもゲーオが助けてくれたのであれば感謝したい。「早く御礼返しに行きなさい」と言うお母さんにしたがい、わたしはゲーオが好きそうなおもちゃ付きのお菓子を買って、また会いに行った。ゲーオとその場に居合わせた人たちは、わたしの話をともに喜んで聞いてくれた。

物は失くすべからず

その後も度々、わたしはゲーオのお世話になった。もちろん、相談のほとんどは失せ物についてである。カメラの件で、物を失くしてもすぐ見つかるだろうと思うクセがついてしまったのだ。ゲーオに相談して、必ずしもよい結果がえられるばかりではない。しかし、失せ物の多いわたしにとって、ゲーオは「ひょっとして見つかるかも」という希望を与えてくれる、心強い存在であった。

日本に帰ってきたあとも、ゲーオが居てくれたら・・・と思うことがよくある。それだけよく物を失くしては、探しているということだ。お母さんに「また失くしたの？」と言われることを恐れる必要はなくなったが、頼るべきゲーオもここには居ない。そろそろ、物を失くさないためにどうすればよいか、考えるべきときが来たのだろうと、頭ではわかっている。

一面に広がる水田から、丘の上のお寺を眺めやる

入安居の日は家族総出で僧侶へ食施を

ノーン・ワットの常連者。今年も準備万端だ

三ヵ月におよぶ雨安居も明けて気分すっきり。中央が筆者